



「教室では生徒が少しでも英語を口に出すよう心掛けて
いる」と語る田中教諭

なぜ 英語が話せないの

<7>

幼児や小学生の英語学習は、まず声を出すことから始まる。先生の唇の動きを注意深くながめ、懸命にまねる。内容は、簡単な日常会話。前置詞も関係代名詞も知らないが、子供たちの表情はいきいきしている。

中学では「これが同じ英語教育か」と疑いたくなるほど、事情は一変する。教室で発音を練習するのは、せいせい一年生まで。文法や翻訳中心になり、生徒たちを「実用とかけ離れた英語」に引き込む。さらに高校、大学になると、英語は「音」とは無縁の存在。英会話に興味

をもつ生徒らが、わずかに「生話せる会話は「ディス・イズ・きた英語」を勉強しているにすぎない」。

半放任。英検一級合格。英会話能力では、県下の高校英語教師の中でもトップクラス。久留米英語講習会会員でもある。しかし「英語教育には多くのジレンマがあり、悩みは尽きない」。

第一に、教師には定められた時間内に定められた範囲を教える義務がある。明善高校の場合、校のように入試にトレーニングを

「中学時代に英語が好きだった生徒が、高校で英語への興味を失うのが一番こわい」と田中先生は言う。英語の嫌いな生徒が増えないためにも教師は局面打開の工夫が必要。あれこれ模索している教師も少なくない。

田中先生は、授業中、単語や英文をできるだけ多く生徒たちに読ませる。発音が悪ければ、何度も言い直させる。簡単なやりとりは英会話でやることも。英作文の時間は、できるだけ生徒の発想を尊重してやる。「外国語を話す喜びを忘れかけている生徒に少しでもその機会を与えたい。ただ、授業に英会話的な要素を導入するのは一年生からでない」と生徒が違和感をもつてうまくいかない。何事も最初が大切だ——。田中先生が経験から得た教訓である。

大切な教師の工夫

授業
では
少しでも英会話重視を

るほど、事態は深刻なのだ。

田中睦・明善高校教諭(左)は、導入した県もあるが、福岡県下はリーダー4時間、文法2時間の高校、大学は相交わらずの分量がかなりあるだけに「教師が授業中に英会話を教えたり、これに英語教師の会話能力の低下が、生徒たちに面白くない

現場の英語教師なら、痛いほど感じて英語教育の欠陥である。中学から大学まで十年間も英語を学んだ者が、卒業後に先生は、大学時代に米国に一年